



No.3 国際学会で初めてのプレゼン! 聴衆を惹きつけるテクニック

「聴衆をひきつけるテクニック」のポイント

- プレゼンの3つのVのうちの「Vocal」と「Visual」について。
声のトーン、抑揚、表情、姿勢、ジェスチャーのつけ方が大切。
- 日本語プレゼン vs. 英語プレゼンの決定的な違い：抑揚なくして伝わらず。
- 「目は心の窓」アイコンタクトや手の動きが聴き手の心を開く。

今回のシルバーマンコーチのレクチャー内容

「Vocal (声)」に関しては、声の多様性に着目します。日本語のような声の調子がフラットな、多くの場合一本調子で話されるような言語を母国語とする者にとって、難しい課題といえます。

英語では、強調して話すために声のトーンや強弱を変えます。声に多様性をもたせて話すことで、あなたのメッセージがはるかに明確になるでしょう。つまり、メインのメッセージは何か、そして何を強調したいのかを事前に決めてから、声の多様性を活かしてメッセージを強調する必要があります。

低い声でゆっくり話すときは、思慮深く話していることを示せます。より速く話し、声のトーンが少し高くなれば自分のトピックについての熱意や情熱を伝えていることがわかるでしょう。

「I didn't say he stole that money. (彼がそのお金を盗んだとは言わなかった)」という7つの単語による文章ですが、実際には7通りの文章となります。どの単語を強調するかによって意味が変わってきます。

そのうち3つの例をご紹介します。

「I」にアクセントを置いて、「彼がそのお金を盗んだとは私には言わなかった」というように言ったらどうでしょう。これは、他の誰かが言ったという意味となります。

では、「say」にアクセントを置いて、「彼がそのお金を盗んだとは言わなかった」と言ったらどうでしょう。これは、口に出して言わなかったけれど、彼がお金を盗んだことをほのめかしたという意味となります。

そして、「money」にアクセントを置いて、「彼がその“お金”を盗んだとは言わなかった」の場合はどうでしょう。私が言ったのは「彼が蜂蜜を盗んだ」かもしれません。

彼が何か他のものを盗んだのかもしれませんが、とにかく彼はそのお金は盗みませんでした、という意味になります。

これが英語のしくみです。

どの文章であれ、声のトーンを上げ下げすることで、何を強調したいかを示すことができます。あるいは速く話したり、ゆっくり話したりすることでも示せます。これらの方法を練習してください。頑張りましょう。

プレゼンテーションにおいて、聴衆にとって最も苦痛の一つと言えるのが、文字がぎっしり詰まったスライドを見せられ、演者はスライドの一部を読んでいるか、スライドの内容と違うことを話している時です。

どういうことかは、スライド例をご覧ください(動画の3分53秒)。

演者の話を聞きながら、スライドの文字を読んで、そこに書かれている情報を処理するのは不可能です。これが苦痛だという理由です。

実際に私も、聴衆がスライドの内容を一所懸命に読もうとしているプレゼンテーションに参加したことがあります。ですが、聴衆は書かれている内容は理解できていません。おそらく、聴衆の頭の中に浮かんでいるのは「スライド(の文字)を読める!」ということだけです。何の情報も聴衆には入っていないのです。

視線は大事です。

聴衆はあなたの目を見たいと思っています。そしてあなたも、聴衆がプレゼンテーションを理解しているかどうかを見極めるために聴衆の目を見る必要があります。

演者が聴衆ではなく、メモばかり見ていたり、スライドの方ばかりを見上げている、そんなプレゼンテーション

にどれくらい参加したことがありますか?

聴衆と明確にコミュニケーションをとりたい場合は、聴衆の中の誰かに直接話しかけるように、その人の目を見て話すようにして下さい。

あとはジェスチャーも使いましょう。私たちの多くはジェスチャーをつけるのに慣れておらず、ジェスチャーをまったく使用しない人もいます。しかし、ジェスチャーはコミュニケーションの一つです。

手のひらを開くようなジェスチャーは、聴衆と一緒にい

る、聴衆を歓迎しているということを示せます。

もし、より威厳を示したい時や内容をよくわかっていることを示したいなら、手のひらを下に向けるジェスチャーを使います。

使用できるジェスチャーはたくさんあります。ジェスチャーを使うことで、聴衆の心を動かせるでしょう。

最も重要なものは、あなたの目の中にあります。目標から目を逸らさないでください。目標とはあなたの聴衆のことです。

こんなに違う! イントネーションのつけ方で、意味が7通りに?

プレゼンテーション動画の中で用いられた、「I didn't say he stole that money」。

この文章は、どの単語に強弱をつけて話すかによって、受け取り手にとっての意味が7通りにも変化します。

動画ではそのうち3つをご紹介しましたが、ここで改めて、聞き手がどんな風に受け取るかをご紹介します。

① “I” にアクセントを置いた場合

「誰か他の人が言ったんじゃないですか?私ではないですよ」という意味になります。

② “didn't” にアクセントを置いた場合

「そんなこと言ってませんよ。(そんな噂があるの?)」という意味になります。

③ “say” にアクセントを置いた場合

「私は言ってませんよ」という意味になります。
彼がひとりの時にお金がなくなったのよ、という可能性があるといた程度で、直接は言っていませんということになります。

④ “he” にアクセントを置いた場合

「(お金は盗まれたけど)彼が犯人だとは言っていない」という意味になります。

⑤ “stole” にアクセントを置いた場合

「彼が盗んだとは言っていない。多分借りただけだと思います」という意味になります。

⑥ “that” にアクセントを置いた場合

「あのお金」とは言っていない」という意味になります。
この場合、「お金を盗んだのは彼だけど、あのお金は盗んでないよ」(別のお金のことは知らないけど)となります。

⑦ “money” にアクセントを置いた場合

「お金を盗んだとは言っていないよ」という意味になります。
この場合、「彼が盗んだのはお金じゃなくて、宝石とかを盗んだ」のような意味合いで使われる場合もあります。

今回は以上となります。

次回は、「研究内容を紹介する時の英語表現アレコレ」をテーマにお届けします。お楽しみにしてください。